



北海道 国際理解教育研究協議会



報 第54号



会長 真木 孝輝



事務局長 池田 幸一



十勝・帯広大会を終えて

十勝地区国際理解教育研究会
会長 久門 好行
(帯広市立花園小学校長)

10月25日、全道各地から400名を超える多くの方々をお迎えして、第23回北海道国際理解教育研究大会が成功裏に行われました。

今大会は、完全学校週5日制のもとで新学習指導要領が完全実施されたことを受け、新しい時代にふさわしい研究大会にするため、次の3点に留意して企画・運営しました。

第1は、授業実践に基づいた実証的な研究を中心に据えたことです。小学校から高等学校まで、教科・道徳・特別活動・総合学習の9本の授業を公開しました。

第2は、教材や人材を帯広・十勝に求め、JICA国際センターの外国人研修生や教育委員会のALT等を積極的に活用したことです。

第3は、研究日程を1日に短縮し、研究のスリム化と重点化を図ったことです。

こうしたことを通して、第7次研究主題「地球を見つめ、自分を見つめ、未来を切り拓く児童・生徒の育成」に基づき、「地球市民」として共生の心をもって地球の未来のために行動しようとする資質を養うため、世界に思いをめぐらせ、自分とのかかわりを意識した視点から国際理解教育の在り方を探ってまいりました。

授業別及び課題別分科会においては、多くの参加者が熱意にあふれた研究協議を行いました。私は次のように成果と課題を考えています。

総合的な学習だけが国際理解教育の授業ではない。道徳や教科における国際理解の授業は、今後の国際理解教育の在り方を示唆する実践となった。

授業の視点を明示し、意図的に教室と世界を結ぶ学びの創造を図った意義は大きい。従来、すべての授業が国際理解教育につながるという傾向が見られたが、2つの視点にそった授業展開はこれを見直す契機となった。

英語活動に関する関心が高く、先進的な実践に学ぶところが大きい。今後、校種間の接続を考慮した実践研究、思考から行動へ発展する実践研究が求められる。

地球市民としての資質を培う多様な教育実践が求められている今日、十勝・帯広大会の実践が次年度以降の上川・旭川大会に引き継がれますようご期待申し上げます。

第7次研究 スタートの全道大会

第23回北海道国際理解教育研究大会・十勝帯広大会

大会主題

**地球を見つめ、自分を見つめ、
未来を切り拓く児童・生徒の育成**

～教室と世界を結ぶ学びの創造～

10月25日(金)に帯広市において、第23回北海道国際理解教育研究大会・十勝帯広大会が行われました。当日は、帯広市立花園小学校と帯広市立帯広第五中学校を会場に小学校、中学校、高等学校合わせて9つの授業が公開されました。また公開授業後には会場を「とかちプラザ」に移し、昼食をはさんで全体会と授業別分科会、そして課題別分科会が行われ、参会者の熱心な討議が行われました。

国際理解教育が「国際教育」へと衣替えが叫ばれるように、理解にとどまらず、問題解決そのものを問う研究が求められています。今大会は、第7次研究スタートの大会であるとともに、「地球市民としての生き方」を育んでいく研究をさらに一歩進め、子供たちが地球とかかわりながら、地球市民としての自己を確立していく過程を、子供たちの問題解決の姿に求めながら進めていく研究のスタートでもあると思います。

今大会は、全道各地から400名を越える方々の参加がありました。

大会に先立って前日の24日には北海道国際理解教育研究協議会の理事会と各地区の研究担当者会議が行われました。理事会の中では、今年度前期の各部の活動報告が行われました。また、真木会長から8月に行われました全国大会長崎大会の報告もありました。

さらには、毎年行われている「在外教育施設派遣教員帰国報告会・激励会」にかかわって、帰国者、派遣者の先生方の中に参加していただけない方もでてきていることが事務局から報告され、各地区ごとに派遣に向けての研修会を実施できないかという提案がありましたが、地区の理事からは、各地区での学習会、研修会は実施しているが、それとともに全道規模での研修の機会は効果が大きいので是非続けて実施してほしい、また地区でも参加を呼びかけていくという意見が出されました。また地区の会長からは、会のメンバーは派遣教員だけではなくむしろ派遣教員はその一部でしかない。しかし、派遣教員を一つの核に、授業実践を通して学習するとともに会の組織も広げていきたいという意見が出されていました。

ご来賓として大会に出席された全海研の滝多賀雄副会長からは、全海研は全国に情報を発信する機関として働いていうというお話とともに、全国の様子をお聞きすることができました。

次ページからは、大会に参加できなかった会員の方々にも大会の様子が分かるようにということで、授業別分科会と課題別分科会の話し合いの様子をお知らせしたいと思い紙面を作りました。原稿は、それぞれ分科会の記録を担当された先生方や運営を担当された先生方に執筆して頂きました。執筆して頂いた先生方には心より感謝申し上げます。

第24回全道大会は、上川・旭川地区で平成15年9月11日(木)・12日(金)開催予定
第25回全道大会は、釧路地区で開催の予定

授業別分科会 A分科会（小学校教科・道徳）

司会者 菅野 達夫（更別村立更別小学校教頭） 記録者 下坂 吉彦（鹿追町立鹿追小学校教諭）
運営者 大西 啓就（新得町立屈足小学校教諭）
授業者 植田 忍（帯広市立花園小学校教諭） 鈴木 毅（帯広市立花園小学校教諭）
助言者 造田 誠（帯広市立つつじが丘小学校長） 橋場 仁（帯広市教育委員会指導主事）

1. 討議の柱

1. 「国際社会を生きる力」と授業づくりについて
2. 世界に思いをめぐらせる場面（内容）のあり方について
3. 自分とのかかわりを意識させる学習活動のあり方について

2. 討議の内容

（1）授業者から

- ・植田教諭～「ありがとう」という教材を使った。これは、普段の子供たちの生活か（道徳）ら考えて思いやりに欠ける行動も見られることがあったので、相手を気遣う優しい気持ち等を育てたいと考えたからである。導入部で「クイズ」を行ったのは、雰囲気作りをしたかったのと、自分自身オランダに行ったことがあるのでそれを生かそうと思ってである。資料はオランダに行った時に撮影したものであるが、この資料を基に、世界に目をはせることをねらった。展開部分では、資料と導入とを関係づけるため、資料の一部をオランダ語に変えた。心と心のふれ合いを一番に考え、日常生活との関連を図った。「ありがとう」という言葉は、言えそうで言えない。自分自身もそうであり、自分のオランダでの体験も話してみた。
- ・鈴木教諭～教科でどうやって国際理解をやっていこうかというところから始まった。指導案の中で、課題を明確にするために「酸性雨から地球を守ろう」から「酸性雨から地球を守るためにできることを考えよう」に変更した。
酸性雨のことを扱ったのは、身近なところからグローバルな視点で環境問題をとらえさせようと考えたからである。現在、総合、社会、理科でクロスカリキュラムで環境問題に取り組んでいる。迷いながらやったので、皆さんの指導をお願いしたい。

（2）三つ討議の柱を視点とした授業への質問・話し合い

- Q 1 理科の授業について何うが、この後の具体的な取り組みはどうする予定なのか？
- A 1 酸性雨調査に発展させていく。グローバルな視野にしたいと思っているが、今までのまとめや、身の回りの水をpH計で測ってみるなどをする予定である。
- Q 2 具体的なまとめの方法を聞かせて欲しい。
- A 2 ノートにまとめる。今後どんな物に取り組みたいかなど。実験の振り返りをノートにまとめる。総合的な学習とどうつなげるか、どう生かしていくかなどをノートにまとめる。
- Q 3 酸性雨を調べないグループもあるようだが？
- A 3 水質調査等を行う。児童の考え方を生かしていけないかと考えている。
- Q 4 次の45分はどうするのか？ずっとノートに書いているのか？
- A 4 ノートにまとめたり、それを発表し合う45分にしたいと考えている。
- Q 5 単元の具体的評価方法は？
- A 5 テスト（市販）、ノート点検で行う。どう総合につなげていくかを見ていきたい。あくまでも教科書の資料を補充・深化したものなので
- Q 6 ノートの評価基準は？
- A 6 グローバルな視点で考えられているか。自分との関わりを考えているか等。
- Q 7 還元の方法は？
- A 7 ノートを読んだり、総合的な学習の中に生かしていくことによって還元する。
- Q 8 なぜプロジェクターを使わなかったのか？
- A 8 事前に映してみたのだが見にくかったし、考えなかった。普段からOHCを使っているのだから。
- Q 9 なぜ大きく映さなかったのか？
- A 9 おっしゃる通りだが、現状ではあれで限界である。
- Q 10 若い人たちが取り組んでいるのは素晴らしい。いつでもどこでも誰でもと言う点でも素晴らしい。授業の中で感謝・礼儀を取り入れていたが、勉強させてもらいたい。授業の最後に自分の体験を話していたが、子供たちはすごく意欲がわいていたと思う。質問だが、オランダに行く前に指導案を考えていたのか？
- A 10 流れは決めていない。子供たちに還元できる物を考えていた。そのため公共物の写真をたくさん撮って

きた。せっかくなのでクイズに使った。自分もオランダのことは自信を持っているので。

Q 11 鈴木先生が酸性雨に関して自身で取り組んでいることを教えて欲しい。

A 11 正直言って取り組んでいなかった。マフラーできたい検知管や布を使って実験したり、一昨日、雨で調べてみた。クラスの中でのゴミの分別など。これから取り組みたい。

Q 12 具体的に。

A 12 ゴミの分別では紙の種別毎に分けるなど。電気ではパソコンをつけっぱなしにしているのを消すようにしたりする。ISOをやっていることもあるので。

Q 13 質問している先生に伺いたいのが、大切なのは国際理解をどう発展させていくかではないか。どういう意図で聞いているのか？

A 13 電気自動車、風力発電を普及させればいいと子供のノートに書いてあったが、そうではないのではないのか。なぜ普及していないのかを考えることが大切なのではないのか。

A 13 自分との関わりとの関係で認識させなければならないのは、近いところは歩いていく、シャワーは小さくする、と書いていたので自分でできることを大切にすることであることを大事にしたい。

司会 教科道徳の中で、世界に目を向ける、自分との関わりはどうあったらよいのかを具体的な例があれば紹介して欲しい。

A 14 P & T。礼儀をしないと身の危険を感じることもあるということを教えている。「どうぞ」と言うと日本は「いいえ」とゆずるが、アメリカでは1度そうやると2度とない。外国では「ありがとう」と言うと、必ず「Your welcome」と言ってくれる。

Q 15 世界に思いをはせる瞬間は？

A 15 実際に写真を見せることにより、ちょっとでもオランダ(世界)に思いを巡らせてくれれば、と考え導入でクイズを取り入れた。

意見 道徳の授業だが、「ありがとう」という言葉は世界にもあるということにフィードバックしていかないと世界に思いを巡らせるということにならないのではないのか。理科の授業だが、水の価値観を考え、まずきれいだということから始まるのでは。フィードバックすることが大切。

意見 道徳の授業だが、視点1・2を受けとめて授業の中で子供たちに投げかけていることが素晴らしい。盛りだくさんの内容になったが、子供たちが学級の生活の中で自分を見つめ直したことに意義があった。やることは足元からやらなければだめだということ再認識した。

Q 16 花園インザワールドに結びつく物はなかったのか？研究に関わって、視点1・2について指導案の中でかかれる場所が統一されているが、何かあるのか？

Q 17 異文化や世界の現実との出会いとあり、異文化は色々やってきているが、自国の文化について今回は見えないが、今後どのように扱うのか？

A 16 1学期に全校行事でJICAとゲームをしたり、縦割りクラスに分かれてフルーツバスケットなどのゲームをした。1対多なので、言葉を交わす時間が少ないので何とかしたいというもどかしさを今回の導入に生かしてみたのだが。

司会 研究に関わって、正直まだきちんと押さえていないが、世界に思いを巡らせる～学習活動、自分との関わりを意識させる～教師の支援の欄に記載している。異文化については研究部長がおりますので。

部長 十勝は自分化にあまり重きを置いていない。異文化を意識させることに重きを置いている。パターンの中にあるが、一連の学習の中でとらえてくれればと考えている。

(3) 助言者から

・造田氏より～道徳の授業に関わって

道徳は学級の雰囲気様が大切である。子供たちの集中力もとぎれずに進んだ。視点1に関わって、フィードバックさせることも必要という貴重な意見を頂いた。視点2に関わってでは、自分とどう関連づけていくかに重きを置かないといけない。国際理解教育は道徳と重なる部分がある。体験が重視されているが、挨拶という実践をやっているのはよい。礼儀を通して他と関わっていることを認識させることができる。国際理解教育は、学習指導要領の目標から考えると、道徳も重きを置かなければならない。

・橋場氏より～理科の授業に関わって

4観点に絞って授業を観た。理科としての基礎基本をどうするかでは、見通しなど理科ということを中心に明示し、単元の中にあることを示唆してあった。ヒントが多すぎたが、考えさせることも大切である。成果としてどのように表れているかでは、地図の読み方や蓄積を感じた。資料の工夫もあった。教科の本質をとらえれば世界に思いを巡らせることができる。身近な物から実践できることを学んだ。世界に通用する内容かでは、誰でも被害者にも加害者にもなりうることを全世界をとということで扱っていた。客観的なデータも使用していた。教室の空間は自由人権が生かされているかについては、言葉遣い、子供に視点を合わせる、子供の意見を引き出そうとしているなど配慮されていた。参加型の授業をやっていた。自己責任に関しては、年間を見通し意図的に取り組むことが必要。外から自分を見つめる力がついてくる。時間配分の累分けなど今後の研究に期待したい。

授業別分科会 B分科会（小学校特活・総合）

司会者 梶原 源基（幕別町立札内南小学校教頭） 記録者 田中 善久（音更町立駒場小学校教諭）
運営者 片山 剛（帯広市立帯広小学校教諭）
授業者 坂田 香織（帯広市立花園小学校教諭） 河井 義徳（鹿追町立鹿追小学校教諭）
前田 哲哉（帯広市立緑丘小学校教諭）
助言者 金子 良子（音更町立下土幌小学校長） 舟越 洋二（鹿追町教育委員会指導室長）

1. 討議の柱

- ・「国際社会を生きる力」と授業づくりについて
- ・世界に思いをめぐらせる場面（内容）のあり方について
- ・自分とのかかわりを意識させる学習活動のあり方について

2. 討議の内容

（1）授業者から

坂田教諭～前回の学活で決めたパーティーの形でスザンさんと授業を進めることができた。子供たちは最初緊張していたが、楽しく活動できたと思う。次回は、カナダの人口などほかのことも調べてみたい。

河井教諭～小学校における英語活動、AETを使わない授業ということで、授業づくりに挑戦した。また、今年になって、カナダで指導理論を学んできた。それらのことを授業づくりで役立てた。子供たちは、鹿追町からバスに乗りあさやってきて、はじめての場所と大勢の先生方とで慣れない環境だったため緊張していたようだった。

前田教諭～機械が正しく作動するかが心配でした。授業では、題材として地元のものを使うことにこだわった。十勝は農業王国、しかし、このクラスには、農家の子供がいないので、5年生の時に社会科で十勝の農作物を取り上げたので、自分たちで育て、調べ、調理した。その時の経験から題材として取り上げた。また、今回の授業は、『食から見えるシンガポール』という授業をシンガポール日本人学校に在職しているときに見て、それをヒントにした。自分たちが食べている食料のほとんどを世界に依存していることを知ってもらい、食料問題、環境問題にも発展させることを目的にした。ものが中心となってしまい、人との交流が薄かった。人とのかかわりをもっと取り上げたかった。

（2）三つの討議の柱を視点とした授業への質問

Q1 河井先生へ、子供たちが英語を通して変わったこと、日常生活や教科でコミュニケーション能力の成果など聞かせてほしい。

Q2 国際理解教育の中で今後、英語活動が独立していくのかどうか、教えてほしい。

Q3 一年間の指導計画の中で意図的に指導しようと思っている語彙はあるのか。

Q4 子供が英語活動の中で飽きないために先生が工夫している点を聞かせてほしい。

A1 新しく来たAETが日本語があまり通じないため、子供たちは自分から意識して、コミュニケーションをとろうとしている。『話したい』『覚えたい』という意欲がのびてきている。

A2 英語の活動は、国際理解教育の一環で、独立しないというのが、十勝のスタンス（助言者から）文科省の方針として今後、小学校における英語活動は、教科として積極的に国レベルですすめられることでしょう。

A3 語彙を増やすというのが目的であって、センテンスを増やすことは目的としていない。「ちなさい」「並びなさい」など、英語で指示をするのが自然に身につけてほしいということで意図的に使用している言葉もある。

A4 変化をくわえたり、前回と違った方法で教えたりしている。

Q5 すべての教科、領域で表現力の育成はどのように行っているか、それぞれの先生に聞かせてほしい。

A5 前田教諭～伝え合う力を伸ばしたい。表現力を重視している。毎朝のスピーチ活動、テーマを決め、それにそった話ができるよう指導している。そのため、話し合い活動など意欲的になってきた。

河井教諭～ドラマによる表現活動を取り入れている。リトミック；リズムに合わせて踊ったり想像して表現する。国語科では、書くことから話すことへと表現活動を広げていっている。

坂田教諭～低学年にふさわしい言語活動で、けじめをつけながら、自分の言いたいことを適切な言葉で表現することを指導している。帰りの会で、一日の中で楽しかったことの発表をさせている。

- Q 6 前田先生の授業において、テーマを決めるまでゆるやかであったように感じた。先生に迷いがあったのではないかと。また、食糧問題は、いつから取り上げてきたことなのか、そして、子供側から出てきた問題なのかお聞きしたい。子供たちから出てきた問題なら、もっと切実感があっても良い。
- Q 7 この教材で子供たちをどのように変えていくかが問題である。今日のこの時間だけで終わってしまったら、大切なことを学ばず終わりにになってしまう。次の授業でどのような迫り方をするのか。
- A 6 まよいはありました。もともとおとなしいクラスであった。そこで表現力をつけさせるためにどうしたらよいか、悩み取り組んできた。食糧問題は、子供たちが調べていく中で、食料についての疑問などがでてきたため、教師側で取り上げてみた。
- A 7 5年生の段階で、社会問題となった雪印事件を調べてきたグループがあった。自分ならどうするか、どうあってほしいか、考えるようになってきた。
- Q 8 河井先生の4年生の英語活動の授業では、授業において先生は全て英語で指示されていたが、子供たちも先生の言っていることを理解し、かなりのレベルであると感じたが、4年生の段階でここまで来てしまったら、5年生ではどうするのか。このまま続けていけば、6年生では、中学2年生くらいのレベルになり、中学校へ進学したときには、極端な差が出るのではないかと。札幌市でこのような授業をしたら、父母の間から、「うちの学校でもこのような授業を…」という要望が殺到するであろう。中学校との連携は図れているのか。
- A 8 4年生の段階で英語の聞き取り、語彙力の増加をしたからといって、中学校で困るということはない。学年間の格差があるというのは確かである。鹿追町では、中高一貫教育を来年行うことを予定している。
- Q 9 坂田先生の授業について、ALTのスザーンさんは、日本のをよく話せたり、子供たちとコミュニケーションがとれてすばらしい。帯広市では、ALTが学校に来てくれる回数は何回あるのか。また、担任とALTの授業においてのかかわりについてお聞かせください。
- A 9 花園小学校には、年に4回（低学年では4時間）事前の打ち合わせをもって授業に取り組んでいる。担任とALTの授業でのかかわりですが、今回は、ALTの「スザーンさんに会いたい！」という子供たちの気持ちを高めるため、子供たちとスザーンさんを授業まで会わせなかった。今回は、子供たちに進め方を任せため、担任はあまり出ず、スザーンさんに中心になってもらった。

(3) 助言者から

金子氏より

2年生の学級活動の授業では、異文化理解がよく出ていたようでした。子供たちは、スザーンさんが英語で話した言葉の内容をおおよそ理解していたように感じた。子供たちは、スザーンさんに抵抗なく接することができていた。世界地図を見せるだけでなく、カナダの地形を切り抜き、日本と比べたり、人口などを話したり、自分と他国の人を比べたりと様々な方法で今後も子供たちの興味を持続させてほしい。

4年生の英語活動の授業では、セカンドランゲージの学び方を教えるための方法を見せていただきました。河井先生は、ALTを使わず担任が授業を展開する方法で行いましたが、このほかに、英語が得意ではない先生のための授業展開、ALTを活用した授業展開も研究が進められています。いずれも、学ぶ側の子供たちが、「英語を勉強してこんなことをしたい…」という意欲を持ってくれるよう河井先生のように取り組んでほしいと願っています。

前田先生の授業では、課題解決を意識して取り組んでいたところが良かったと思う。課題を焦点化して取り組みやすくしてやると、子供たちももっと積極性が出てきたことでしょう。

舟越氏より

坂田先生の授業は、「国際社会に生きるための態度」に沿った授業であった。スザーンさんと一緒に先生も何らかの形で関わっていくとなお良かったと思う。河井先生の授業については、小学校の英語の学習は、個に応じた繰り返し練習が大切であることをあらためて教えてくれた。

鹿追町のALTは、2人いたが、日本語で対応してしまうため、これではいけないと考えたことがある。ALTが英語しか話せないと、せっかくの機会と子供たちは自ら交流しようとする。片言の言葉と身振りでも通じるとおもしろいと感じ、これが意欲につながっていくと思う。

前田先生の授業から感じたことは、子供たちの興味のあることをどんどん広げ発展させていくと子供たちの関心も増し、意欲につながると思う。身近なことから感動できるよう今後の指導にも期待します。

授業別分科会 C分科会（中学校教科・道徳）

司会者 小幡 剛（帯広市立帯広第5中学校教頭） 記録者 近藤 孝志（帯広市立愛国小学校教頭）
運営者 玉川 弘幸（大樹町立尾田中学校教諭）
授業者 細木 英希（帯広市立帯広第5中学校教諭） Canuel Greg（ALT）
高橋 謙（帯広市立帯広第3中学校教諭）
助言者 森戸 春樹（帯広市立広陽小学校長） 村松 正仁（帯広市教育委員会指導主事）

1 討議の柱

- （1）「国際社会を生きる力」と授業づくりについて
- （2）世界に思いをめぐらせる場面（内容）のあり方について
- （3）自分とのかかわりを意識させる学習活動のあり方について

2 討議の内容

司会より：討議の柱を紹介

授業者より：討議の柱および授業について

<中二英語> 細木、グレッグ

- ・1については、世界の文化・風習は生徒自ら調べた。知識、理解、態度の育成をねらった。
- ・2については、世界のホームステイの内容をゲームを通して考えさせた。
- ・3については、自国との関わりを意識化させ、日本の中でもいろいろな違いがあることを考えさせた。
- ・授業については、英語カードがうまくいった。1年生の時から実施しており、グレッグ先生の助けもあった。

<中三道徳> 高橋

- ・本時は、体験を通して何が芽生えたか、何が大切だったかを考えさせた。ALTと協力して各質問を考えてきた。予定していた「天声人語」は使わなかった。交流員の言葉で充分であった。
- ・1については、言葉の壁を乗り越えて交流したいという生徒の気持ちを尊重し、グループ分けは自分たちで考えさせた。
- ・2については、交流を通して世界に思いをめぐらせることができた。
- ・3については、事前準備を通して仲間同士の交流が深まった。グループで学ぶ大切さ、自分との関わりを理解できた。

質疑、感想

<道徳の授業に対して>

最初の10分間は、生徒にとって大切な間になっていた。その時間で、心の余裕ができてきた。生徒同士の横のつながりもできてきた。最後の10分の交流が心に残った。

（高橋）生徒には30分は長いと言ってきた。準備をする大切さも話してきた。

石狩でもJICAの訪問を実施している。生徒は当初「こわい」と思っていたが、そうではないとわかったり、背の低い人もいるとわかった。質問だが、事前にどの程度外国人と触れ合っていたか。

（高橋）小学校で、いろいろな方と授業で交流している。中学校でも授業でALTと交流しているが、大規模な交流は初めてである。

経験のあるなしで、生徒に差は出てくるか。

（高橋）生徒から、英語力でグループ分けしなくてもいいと提案。ホームステイなど経験のある子は、リーダーでなくても場を和ませるなど積極性を出していた。

<英語の授業に対して>

ALTがオールイングリッシュだったことに驚いた。グレッグがさりげなく質問しても、スムーズに答えを返していた。質問だが、カードの「中国」「インド」等の例で内容をどのように深めさせているのか。（トイレの有料の件等）

（細木）社会の授業等で深めさせたい。内容までは、深く考えていなかった。

文化・風習の理解には、類似性を理解させるというグレッグの言葉に感動した。
生徒が事前に調べていたおもしろい内容のカードに驚いた。先生方の細かい準備が参考になった。

<国際理解教育に関して>

道徳の授業では、どんな点を国際理解教育として考えて行ったか。これからは、そうしたことを体系づけることが大事になるのではないか。

国際理解の系統だった教育を、現場から提言していくことが大事になってくるのではないか。

今の意見とは逆の発想だが、国際理解は各教科・領域の中に含まれるもので、だから使いやすいのではないか。逆にコンクリートされると、かえって大変になる。

カリキュラムを作っても、すべての学校に当てはまるとは限らない。各学校で、独自のねらいを持つことが大切である。

(高橋) 国際理解の内容には、不易と流行の部分がある。使い方によって、面白いやりがいのある授業も可能になる。

高橋先生の授業は、道徳の窓を通して国際理解の授業に取り組んだことに敬意を表したい。各グループごとに考えた素材で、温かい交流ができた。生徒の感想に、交流員に日本語が通じるとの感想があったが、自分が外国に行ったときのあり方・行動を考えるきっかけを与えた。

3 助言者より

英語の授業について(村松氏より)

(1) 十勝・帯広の国際理解教育の目指す視点が、五中の授業に具体的に実践されていた。多様な異文化の生活習慣・価値観等について、違いを違いとして認識し、相互に共通する点を見つけようとしていた。相互の歴史的伝統、多元的な価値観、これらを尊重し合う態度を育成していた。

指導計画を見てもわかるように、関心意欲を引き出す、英語としての基礎基本をおさえる、生徒の思考を深めるという過程を経ながら、異文化や世界の現実に出会う学習を意図的・計画的に構築していた。

(2) 自分との関わりを認識させる学習活動を授業に構築していた。地球市民としてグローバルな視点で問題解決ができる生徒を育成しようとする意図が感じられた。英語科としてのねらいもはずさない配慮がなされていた。インターネットで風習を調べたり思いを巡らす活動に絵や映像も加わると、より実感も深まった。

(3) ポイントを絞り、授業の中で国際理解の形を示した。英語そのものが、国際理解教育として考えられる。国際交流の手段としての外国語の重要性がますます高くなってきている。今回の授業は、コミュニケーションに重点をおきたいという意図が出ていた。ポイントを絞り、授業の中でどんな国際理解ができるかということを示唆する授業となった。

道徳の授業について(森戸氏より)

(1) 道徳を通して国際理解を、国際理解を通して道徳を、それぞれつながっていた。

(2) 生徒が必死に東欧圏の交流員の英語を聞き取ろうとしていた。半分ぐらいは理解していたのではないか。分かり合おう、コミュニケーションをとろうと努力していた。

(3) 思い切って30分交流にとったのは成功した。また、最初の交流員の自己紹介で、生徒に日本語も少しは話せるという安心感を与えた。実際の交流は、英語だけでおこなっていたが。

(4) JICAは、道内では札幌と帯広のみ。その環境をうまく生かさせた。

(5) こんな授業もできるという実践になった。各地に持ち帰り、それぞれ取り組んでみる価値のある授業である。



授業別分科会 D分科会（中学総合・高校教科）

司会者 海谷 勇子（帯広市立清川中学校教頭） 記録者 森本 聡（音更町立鈴蘭小学校教諭）
運営者 杉野 浩利（芽室町立芽室中学校教諭）
授業者 小室 彰人（新得町立新得中学校教諭） 中澤 香織（北海道清水高等学校教諭）
助言者 長井 久男（清水町立御影中学校長） 佐藤 敬示（帯広市教育委員会指導主事）

1. 討議の柱

「国際社会を生きる力」と授業作りについて
世界に思いをめぐらせる場面（内容）のあり方について
自分とのかかわりを意識させる学習活動のあり方について

2. 討議の内容

授業について

授業者から（中学校総合）

1年間で環境、人権福祉、国際理解の分野を取り組んでいる。本授業は時間内で子供たちの意識を引き出しきれず、もう少し時間がほしかった。授業構成は、前半がゲーム（疑似体験）、後半が元青年海外協力隊員の話の構成。ゲームによる子供の気づきは、改善によりもっと広げることが可能である。元青年海外協力隊員の話により、子供たちを地球規模のステージに立たせることをねらった。思い通りにいかなかった部分が多かったが、一つの疑似体験を含む授業例として提案できたのかなと思う。

授業者から（高等学校教科）

地歴や英語の入門編の形として計画が立てられており、選択授業ということで教科として設定されている。したがってメンバーはいつも一緒のメンバーではなく、何らかの形で世界や地球に興味のある生徒25名で行われた。指導計画表の他に、世界のニュース等から授業に取り入れて考える授業を行っている。前時は世界にどのような問題があるか、自分たちの目指す方向を探り、本時で他人と協力も含めて何ができるか考える流れになっている。自分の出した意見が全体に反映する授業構成にならなかったのが、反省点である。

意見・質問から……

ゲームで子供たちがどんな点に気づき、どんな意見があったのか。（中）

自分たちの今までのルールが通用しない、何か変だなと思うようになっている。今回の授業では気づきが浅くて残念だったが、プレ研では激しい反応があった。

国際理解教育の目指す段階と中学校の単元構成との整合性についてはどうか。（中）

小学校で培ったことをもとに、中学校では質的に高まっていくようになっている。2年生からは選択制になっているが、1～3年まで国際理解を選択した生徒は、かなり質の高いものとなる。

どのように個々人を評価していくのか。（中・高）

ワークシートにまとめていく。それを使って最後に新聞にまとめていく。それらをもとに文章表記による評価を行っている。（中）

定期試験のポイントと平常のポイント（授業の意見・態度）を1：1で評価している。（高）

自分たちにできることは何かなど、今後どのように授業を発展させていくのか。（中）

本授業はきっかけ作りであり、もっと調べたい、自分の課題を見つけるという方向に発展させたい。年度当初から、さらに進むような疑問、課題を見つけていくことが、年間を通してのねらいと位置づけている。

4月からの授業の積み上げは何か。（高）

発展途上国と日本との関係、世界の紛争等々の問題を考えることを取り組んできており、生徒達の頭の中に良く残っていたようだ。

外国事情という選択科目であるが、社会科等の教材研究は必要か（高）

地歴を教材研究したり、専門の先生にお聞きしたりして研究している。特に、宗教に関してはきちんとした理解がなくてはならない。

各地の実践や状況等

帯広A中

1年 世界に興味を持とう（調べ学習中心）

2～3年 その後、特に広がりがないのが残念

旭川 A 中

JRC 活動、奉仕活動、環境、国際理解で進めている。その中の国際理解は、

1年 世界について気づき、考える 社会科ではなく人々とのかかわりから

2年 世界と日本との関係

3年 私と世界 自分が世界に対してどうかかわることができるか

個々の教師が価値観、観点が違い、意志統一が取りづらい。子供たちには、どの部分を強調して教えるのか、不安を抱えながら進めている。

苫小牧 A 中

異文化をどう感じさせるか、体験させるか。自国文化を知って、その上で異文化に触れる組み立てをしている。

1年 苫小牧を知ろう

2年 北海道を知ろう

3年 東北から日本を知ろう 世界に目を向けよう

静内 A 中

自国と外国をバランスよく、同時進行で行っていくようカリキュラムを組んでいる。何をどう考えさせるかははっきりさせないで授業を行うケースが多いが、本日の中学の授業は気づかせるきっかけがはっきりしていて新鮮だった。

旭川 A 高

1～2年 週2時間ずつ宗教的なことをベースとして、地球規模のことにつなげて考えていく

3年 国際事情きちんと事実をキャッチし、宗教、社会、英語の担当者が同じ内容のものを指導している。

JICA 職員の授業感想

中学校の授業を参観したが、後半のグループでの話し合いにおいて、先生方がグループに加わり、「知らないことを知る楽しさ」を自ら実例を示す形でリードしていることにすばらしさを感じた。

これから身につけさせたい力、学ばせたい力は？

周りとのかかわりを意識した行動。国際理解の異文化を尊重し、共生していく点からも学ぶことができる。

助言者から

中学校の授業では、子供たちの見方の転換を迫る一つの例が明示されていた。当然のことが当然でない。どうやって共通点を見いだせるのか。ゲームとしては意味のある提示であり、しかも青年海外協力隊からの実例をもとに深めていく構成であった。まさに今、求められている授業の形に沿った形のものであった。

高等学校の授業では、ねらい、準備、他の分野との関連が押さえられていた。指導計画の段階では、例えばユニセフの「開発のための教育」のような国際的共通理念をもう少し意識して進めるとさらに実りあるものとなる。

新しい地球社会を作る視点の授業であった。こちら側から考えると文化習慣の違いから困った人達がいることも海外では大いにあり得るが、そういう人達と地球市民としてどう接するのかを問うものであった。また、国内に目を向けても同じことが言える。

授業の視点が正しかった。相手との間でどちらが正しいかではなく、価値観をお互いに尊重する流れであった。それはまず、お互いを知ることから始まる。

教室内で間接的な手段で子供たちに体験させねばならないところに歯がゆさがありアイデアが必要となる。出口には評価がつきものであり、その部分は事前にはっきりさせておくべきである。

解決してこそその課題あり、単元計画の中に解決できる時間を設定しておかなくてはならない。

異文化を知り、尊重する学習を意図的に総合教科に組み入れておく。それにより、指導に連続性を見込むことができる。

授業では、国際社会に対する諸問題に向き合っていく姿勢を持つという視点が達成したのではないかと考える。国際社会では自分自身が異文化の対象となる。また、異文化とはよその国とは限らず個人の価値観をどこにおくかということでもある。そのことは、指導をより一層難しくさせているとも言える。この国には何ができるか等、絞っていくと話が深まっていく。

異文化理解と異文化を共存することの違いを意識した上での国際理解教育でなくてはならない。認めたと拒否するのか、納得できないけどできる等々、自分に対する問いが必要である。

答えがハッキリしている教育もあるが、国際理解教育の中では、答えのない教育（個々人によって違いがあり正解が確定しないもの）も必要である。

課題別分科会 第1分科会

分科会テーマ 「学校における国際理解教育の計画と実践」

提言者 三和 史朗（古平町立古平小学校教諭）
織田 靖雄（芦別市立西芦別中学校教頭）
塚田 絵理奈（釧路市立桜が丘小学校教諭）
郷地 利明（旭川市立東光小学校教諭）
助言者 豊田 収（乙部町立乙部中学校長）
樋原 永幸（釧路市立柏木小学校長）
及川 勝也（網走教育局指導主事）
司会者 石塚 信彦（芦別市立西芦別小学校教頭）
運営記録者 大磯 俊一（小樽市立高島小学校教諭）



討議の柱にそって、4人の提言者より発表があった。三和史朗先生からは、「ステレオタイプからの脱却」というテーマで、誤った人の見方を払拭するため、ステレオタイプの質問から一般的に思っている一方的な考え方を改めさせるよう取り組んだ社会科の授業について提言された。織田靖雄先生からは「国際理解教育で目指すもの」というテーマで、授業実践などが提言された。特に、理科第2分野「地球と太陽系」では、地球上の色々な地点から太陽の動きを調べ、太陽は南の空を通るという固定概念が破られ、外国の文化や習慣の違いにも子どもたちの目が向けられたと発表があった。郷地利明先生からは「学校における国際理解教育の計画と実践」というテーマで、旭川市の姉妹都市・友好都市について調べた実践などについて提言された。身近にありながら気付かなかった事実について子どもたちが興味・関心を持ち、ゲストティチャーとの交流では意欲的に交流活動に参加していたと発表があった。塚田絵理奈先生からは「国際理解教育における『実践的な学習』を育てる学習活動を目指して」というテーマで提言された。食文化に着目した単元開発を行ない、本場のインドカレーを食べる体験的活動を組み入れることによって、子どもたちが自ら学び考えることをねらったと発表があった。

研究討議では、塚田先生の実践について「なぜカレーを取り上げたのか、またインドの方とどんな交流があったのか？」「授業の中でのテーマ・課題は何？」三和先生の実践について、「ステレオタイプを授業の柱にしているが、子どもたちはどう変化したか？」「民族の持つアイデンティティとどう関連していると思うか？」などの質問があった。

助言者の3人の先生からは、次のようなまとめがあった。豊田 収先生からは「素晴らしい実践であり、底辺が広がってきている。」「ステレオタイプについては、常識のくつがえしであり、教える側のステレオタイプの払拭が必要である。」「実践の計画を立てるためには、まず目標が立てられ、各教科学校の目標の関わりから構造化することが必要である。」「小学校の英会話については、中学校の英語教育とのつながりが大切である。また、各小学校、卒業後進む中学校との連携が必要である。」樋原永幸先生からは「楽しい授業の実践を行なっている。」「質、内容が大きく変化してきている。」「英語活動については、なぜ英語教育なのかとらえていく必要がある。各教科とのクロス、教育課程など各学校で考えていくことが大切である。」「授業の姿がよく見える発表内容だった。」及川勝也先生からは「総合的な学習の時間だけではなく、あらゆる領域で国際理解教育が可能である。」「単元として構築するためには、各教科の目標とマッチしているか考え、内容研究と方法研究をあわせることが大切である。さらに、子どもの実態発達段階、地域性、どの教科で、どの時間、どの学年で、子どもの必要性、興味関心などを考え、先生が単元構成の能力を身につけることが大切である。また、教育課程に位置付け、問題解決のプロセスを大切にすることが重要である。」

課題別分科会 第2分科会

分科会テーマ 「国際交流や国際協力を通じた国際理解教育の実践」

提言者 田子 信（上磯町立浜分小学校教諭）
齊藤 悦代（占冠町立トナム小中学校教諭）
桜田 弘道（置戸町立秋田小学校教諭）
助言者 射守矢秀治（寿都町立寿都小学校長）
南 信義（旭川市立広陵中学校長）
松田 賢治（十勝教育局指導主事）
司会者 中村 一治（千歳市立長都小中学校教頭）
運営記録者 広瀬 保志（札幌市立三角山小学校教諭）



第2分科会では、討議の柱に沿って3つの提言があった。田子先生からは、渡島国際理解研究会の現状と町ぐるみで取り組んだ国際交流実践の提言があった。齊藤先生からは、『姉妹都市交流を通じた実践』というテーマでアメリカ、アスペン市（コロラド州）との自治体ぐるみの交流の様子が報告された。桜田先生からは、網走管内の国際理解教育の現状が、実践・理論とも大変すばらしい提言をいただいた。

研究討議の中では、人材バンクなどのネットワークについてとして、

謝礼については、予算化されているところは多いと思う。

A L Tについては、保障されているが、ボランティアは、まだまだである。

池田町では、人材はすべてボランティアである。

（N P Oの関係の方）準備、交通費等に対しては、きちんと出すべきである。

しっかりした人材バンクのネットワークがほしい。（池田町）

実際は、人づてでしかわからないのが現状。

池田町と帯広市の交流員との相互交流も、関係機関を通せばできる。

（帯広国際交流員）帯広だけでなく多くの人に、ブラジルのことを知ってもらおうと思っている。その機会を作るようにしていきたい。

J I C Aからは8件の派遣ができた。

（J I C A職員）年200名程度、研修員として、開発教育支援と称して、元青年海外協力隊などの人材を派遣している。

派遣をしてはいるのだが、その活動での子供の変容を知りたい。（齊藤実践に対して）

Eメールの交流や、交流の様子のホームページを立ち上げるようになってきた。

子供たちは、積極的な興味・関心を持つようになってきた。

まとめとして（助言者より）

射守矢先生

- 単なる異文化理解にとどまらず、もう一步踏み込んでいこうという気持ちがあるが、この分科会では具体的な例がでてきた。異文化理解から、対話や自分の生活を振り返ることが大事と考える。常に、『自分はどうか、自分の周りはどうか』を考えられる子を育てるようにしたいと思っている。
- 島国根性からの脱却、心の豊かさを我々教師に求めたい。
- 姉妹校提携交流は、異文化理解のきっかけとなる大事なものである。関係機関との連携をより密接に取るようにしたい。
- すべては、人間関係作りである。むずかしいが、分かり合う努力を心してほしい。

南先生

- 恵まれた環境と、それを生かした帯広の方々はずばらしい。
- 田子レポートについて
学校、地域、過程との連携、とりわけ教員が、地域に出ていくことに素晴らしさを感じる。
- 齊藤レポートについて
交流に歴史的価値を感じる。そして継続した交流が行われている。学校とむらが一体となって取り組んでいて素晴らしい。
朝日町では、A L Tとの交流・授業から、中学生を外国へ留学させる事業を行っている。同年齢の子供同士の交流を実現できたら、もっと効果が上がるのだと思う。
- 桜田レポートについて
素晴らしい。道の研究部の7次研究にもある、自と他とのかかわりと国際理解教育の関係もよくまとめられている。
国際理解教育の理解という言葉を取り、国際教育にして、子供に何か起こさせるのを期待したい。

松田先生

- キーワードとしてボーダーをとる。地域、学校、家庭の枠をとる。自と他との枠をとる。単年度の枠をとる。もしかしたら、教科の枠をとる。そしてつなぎ合わせる。考えていただきたい。
- コーディネートしていただきたい。ここにいる会員が、ネットワーク、人材バンクなどを、我々が作るんだ。という気概を持っていただきたい。行動化できる環境は、今年度から広がったものと思う。是非、活躍されるよう期待している。

課題別分科会 第3分科会

分科会テーマ 「外国人子女や帰国子女に対応する国際理解教育の実践」

提言者 安藤 紀子（帯広市立稲田小学校教諭）
棚瀬 敦子（札幌市立新陽小学校教諭）
助言者 安藤 祇（札幌市立平岡中央小学校長）
飯田 幸三（南茅部町立木直小学校長）
横山 佳彦（十勝教育局指導主事）
司会者 佐藤 稜子（三笠市立三笠中学校教諭）
運営記録者 藤野 十志幸（北広島市立西部中学校教諭）



第3分科会は、「外国人子女や帰国子女に対応する国際理解教育の実践」を討議の柱として、充実した話し合いを行いました。提言をされる2名の先生方は、昼食時から、片やビデオ、片やパソコンと、視聴覚機器を巧みに操り、精力的に準備されていました。また、効率のよい発表を心がけようと、資料を読み返し、準備されている姿が大変印象的でした。

分科会は、予定されていた人数よりも少ないように感じられましたが、定刻を多少過ぎた14:43に開始されました。

帯広・稲田小、安藤先生の実践は、アフリカ・ザンビアからの転校生・デニーズちゃんとの心温まる交流を紹介したものでした。初日、歓迎の歌でデニーズちゃんを迎えた子供たちでしたが、デニーズちゃんは泣いて家に帰ってしまいます。そんな大変な形で始まった交流でしたが、子供たちの熱い思いが、少しずつデニーズちゃんの心を開いていきました。特に学習発表会当日になって、「私、劇にでたくない。」「みんなは肌色なのに私だけ黒い。」と言って泣くデニーズちゃんを「一番大事なものはハートなんだよ。」と励まし、大きな一歩を踏み出させた先生の熱意には大いに学ばされます。

日本語も少しずつ覚え、たくましさも身につけていったデニーズちゃんは、「校長センセ」に「来年も安藤センセと一緒にして下さい。」と3度もお願いに行ったそうです。そして、今では「まだ日本にいたいなあ。」というまでになっているそうです。

札幌・新陽小、棚瀬先生の実践は、ロシアからの留学生オレグ君との2年間のかけがえない交流を紹介したものでした。親子ともども日本語が話せず、また、ロシアではオレグ君は「先生に憎まれていた。」(母)とのこと。なおさら新天地では不安が大きかったことでしょう。実際オレグ君と対面した子供たちは、怖がって顔を背け、握手さえも嫌がったそうです。そんなオレグ君一家を、先生方をはじめとして、周りの親たち、`ちえりあ`（札幌市生涯学習センター）の人たちなど、たくさんの人々が温かく包み込んでいきました。少しずつ日本語を覚え、「バカヤロー」などと汚い言葉で自己主張することもありましたが、先生は母親との交換日記を活用したりしながら、オレグ君を導いていきました。そして、オレグ君がいたからこそできた授業も数多くあり、オレグ君は学級において存在感を高めていったのです。特に、「ボルシチ作り」の授業では、「(日本の)給食を食べられないオレグの気持ちがあった。」などという声も聞かれ、「オレグと同じクラスでよかった!」という声まで聞かれるようになったのです。

これら、「体当たり」の「熱い」実践報告に、参加者は熱心に耳を傾け、時間が経つのも忘れてしまうほどでした。研究協議に入ったのは15:30ということで残り時間はあまりありませんでしたが、真剣な意見交換がなされました。中でも、自分自身もロシア人の子供を受け入れたことがある先生(今年の提言者)の激励は、非常に実感をもって受け止められました。

その後、助言者の3名の先生方から、称賛と激励のアドバイスをいただき、司会の佐藤先生の「排除」せず「共生」、「適応」と「受容」というまとめの言葉をもって、分科会を終了しました。

そして、その後の各分科会ごとの閉会式では、次期開催地である上川の先生からの力強い決意表明を受け、来年の再会を約束して、全日程を終了しました。

課題別分科会 第4分科会

分科会テーマ 「外国語活動を通してコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践」

提言者 及川 仁（三石町立川上小学校教諭）
橋本 隆史（鹿追町立鹿追小学校教諭）
小野 博史（札幌市立藻岩南小学校教諭）
助言者 笹川 幸一（静内町立静内中学校長）
鈴木 久司（小樽市立手宮西小学校長）
川端香代子（釧路教育局指導主事）
司会者 後藤 宏（札幌市立南の沢小学校教頭）
運営記録者 橋本 直樹（余市町立余市西中学校教諭）



3人の先生方からは、現在それぞれの学校で行われている実践の様子が細かく発表された。いずれの学校も数年前から生活科や総合的な学習の時間に位置付け着実に実践を積み重ねてきた上での発表であった。及川先生、橋本先生の発表はALTとのTT方式で行っている実践、小野先生の発表はALTだけではなく、様々なゲストティーチャーも活用して取り組んでいる実践が発表され、現段階での成果や課題も提示された。

その発表を受け、質疑応答も含めて研究討議が行われた。時間的にあまり余裕がなく、研究発表も予定していた短めの時間の中では収まりきらなかったこともあって、80名を超える参加者の中、3名の質問しか受けることが出来なかった。質問内容は、英語活動のあり方についてやALTとの打ち合わせも含めた校内体制の状況、さらに総合的な学習のねらいと評価の問題などが取り上げられた。

いずれも短い時間の中にもかかわらず熱い討議が行われ、特に評価の問題に関しては参加者の先生方にとっても差し迫った切実な問題であるせいか、まだまだ質問したいことがある、もっと討議を深めたいといった空気が会場全体に感じられた。

時間の関係もあり、まだまだ議論し尽くされてはいない状況ではあったが、そんな内容の方向性も含めて、助言者の3名の先生にまとめていただいた。

笹川 幸一先生（静内町立静内中学校長）からは、中学校との連携を絡めての示唆や、英語指導を通じてのコミュニケーション能力の育成の大切さが指摘された。また、今後英語指導を行っていく上での校内体制や教員間での共通理解などにおけるポイントがまとめられた。

鈴木 久司先生（小樽市立手宮西小学校長）からは、先生の学校での実践も交えて、国際理解教育、そしてその中の一つの取り組みとしての言語活動を進めていく上で、押さえておくべき内容がまとめられた。

川端 香代子先生（釧路教育局指導主事）からは、英語活動を行っていく上での評価の視点が何点か提示され、また、コミュニケーション能力の育成において話す活動だけでなく聞く活動の重要性も指摘された。さらに、今後小学校において外国語活動を進めていく上で、教員側の意識変革の必要性についてもまとめられた。

比較的広い会場にもかかわらず、参加者もびっちり熱気のこもった分科会であった。新しくスタートしたばかりの題材でもあり、今後、より実践が積み重ねられ、その実践を検証、交流していくことの必要性が再確認された分科会であったように感じた。

平成14年度

派遣教員研修会及び

帰国教員報告会開催のご案内

毎年、北海道から在外教育施設（日本人学校や補習授業校）に20名ほどの先生方が派遣されています。そして毎年任期を終えられた先生方が帰国されています。その先生方の派遣研修会と帰国報告会を開催します。

今回は、平成14年の3月末に帰国された先生方に現地での教育実践や日本と違った生活面でのご苦労等を報告をしていただきながら、研修と交流を深めていただきます。そして引き続き、平成15年度に派遣予定の先生方の研修会を行います。

この帰国報告会、研修会は、決して帰国者・派遣者だけの研修会ではありません。海外で暮らした先生方の生の声が聞ける機会ですので、在外教育施設への派遣を希望されている方、またはただ単に海外の生活のことや教育のことについて興味・関心をもっているという方々にも是非参加していただきたいと思います。各地区でも同じような報告会や研修会が行われているところもありますが、全道から派遣された先生方が集まりますので、いろいろな地域の情報が聞ける機会でもあります。実施要項は下記の通りです。この会報は全道の会員に配付されていますが、お知り合いの先生方にもお知らせ頂いてお誘い合わせの上ご参加いただければと思います。

記

平成14年度

派遣教員研修会及び帰国教員報告会

- 主催 北海道国際理解教育研究協議会
- 後援 北海道教育委員会
- 対象者 平成15年度在外教育施設派遣教員
平成14年度在外教育施設帰国教員
北海道国際理解教育研究協議会会員
派遣教員の家族
海外日本人学校、補習授業校及び海外事情に興味・関心のある教員等
- 日時 平成15年1月11日（土）
13:00～17:00（18:00から激励会あり）
- 場所 ホテル札幌会館
札幌市北区北17条西4丁目 ☎ 011-726-1341
- 日程
13:00 13:35 15:25 17:00 18:00

受付	開 会 式	【全体会】 ・講話	移 動	【帰国報告会】 ・現地での実践 ・協議・交流	【派遣地域別研修会】 ・現地での生活 ・協議・交流	閉 会 式	【激励会】 ・挨拶 ・スピーチ
		13:15		13:45	15:35		17:20

理事会総会と冬の学習会（各地区研究担当者による研究交流と学習会）

1月11日（土） 10:00～12:00に開催します。

全国大会参加報告

長崎大会に参加して

北海道国際理解教育研究協議会 研究部
札幌市立月寒小学校 中村 淳

第29回全国海外子女教育・国際理解教育大会が8月6日(火)7日(水)の2日間にわたって開催された。簡単ではあるが大会について報告をしたい。

1, 大会主題

世界に羽ばたき共生できる心豊かな子供の育成

- 新たな時代の「開国」を長崎から -

長崎大会の願い

大会主題に、三つのキーワードがある。「地球市民」「多文化共生」「心豊かな人間性」の実現がこの主題にこめられている。すなわち、21世紀を心の時代と捉え、子供たちが、共生していくこと、心豊かにしていくことで、心を国際化し、心を世界に開くことができる。そして、このことが恒久平和への礎となる。

2, 分科会一覧

- 第1分科会 海外子女教育の現状と課題
日本人学校での実践と課題
日本人学校で実践と課題
補習授業校での実践と課題
- 第2分科会 帰国・外国人子女教育の現状と課題
帰国子女教育の実践と課題
外国人子女教育の実践と課題
- 第3分科会 義務教育段階における国際理解教育の実践と課題
総合的な学習の時間における国際理解教育の実践と課題
小学校「英語活動」の実践と課題
これからの「外国語教育英語教育」の展望と課題
- 第4分科会 地域社会と連携した国際理解教育野取り組みと課題
市民レベルの国際交流活動及び地域に開かれた国際理解教育の実践
地域に開かれた国際理解教育の実践と課題

「国際理解教育が国際教育へ」とこの流れが見えてきた大会であった。大会でワークショップが当たり前のように開催されるなど、国際理解教育は、理解ではなくいかに行動するのかまた行動させようとするのかという地球市民としての「生き方」を問うているといえる。

その中で教育課題として「外国人子女」の教育と「総合的な学習における英語活動」が注目を浴びていた。とくに「英語活動」においては、導入は当たり前という前提で実践が進んでおり、異文化理解ばかりでなく、「道具」としての「英語学習」を進めていこうという研究が進んでいる。

このように、二十一世の国際理解教育の方向性を整理し、進むべき道を明らかにする大会となった。

IE フォーラム

英語教育に関する見直しが益々勢いを増してきた。「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の策定について(英語教育改革に関する懇談会)・「『人間力戦略ビジョン』新しい時代を切り拓くたくましい日本人の育成」と、どの提言にも「国際社会を生きる日本人には「英語」のコミュニケーション能力が必要であり、そのために具体的な行動が必要であると主張している。また、どの提言も「戦略」という言葉を使うなど、国の姿勢の強さがうかがえる。

英語力が十分でないため、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価を得られないといった事態がおきていることから考えても今の英語教育が見直し時機であることに間違いはない。また、「英語の使える日本人」と「使える」の言葉に表れているように、国際社会に生きるための英語を「道具」と主張していることも頷ける。

このようなことを考えると、ごく近い将来に小学校に英語が教科として導入されるなど新たな展開がなされることは間違いなさそうである。実際、英語を教科に導入する動きも全国的にできてきている。

外国語を「異文化」として捉え、外国語による活動を「国際理解教育」の手段として実践を積んできた我々にとって、この時機はまさにチャンス到来。言葉を「覚える」ものではなく、自分を語り、自分を創り、そして様々な人々共に生きる「道具」として子供たちが獲得できるようこれからは今まで以上に積極的に発言をしていきたいものだ。

図書紹介

アスペルガー症候群と学習障害

榊原洋一 1951生まれ

東京大学医学部附属病院小児科医長

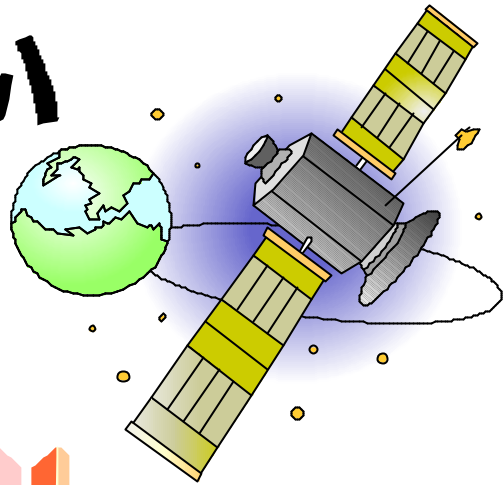
小児科医として発達障害児の医療に携わる

「子供がわからない。」という言葉がこのごろいろいろな所から聞こえてくる。このように子供達の心のあり方が注目を浴びている。著者は「小児科医」として長年にわたり子供の精神発達を現場から「心の問題」をとりあげている。

前半は、「子供のこころの発達は何でわかる」と心の複雑さとそのすばらしさを述べている。また、後半部分では、今、心の問題として注目されているアスペルガー症候群を取り上げ学習障害とからませながらその概要について説明をしている。

心の問題を「障害」と結びつけることは、レッテル貼りであり、差別を助長するという危険を著者はあえて犯しながら、著者は子供の心の状態を客観的に捉え、子供一人一人を支えていくための術を考えていこうと主張している。子供の心とは、教育とはそんなことを見つめさせてくれる本である。(北海道国際理解教育研究協議会研究部長 中村 淳)

海外からの お便り



いつもベトナムの話やニュースを送って下さっているハノイ日本人学校の武山先生から10月末と11月はじめに相次いでお便りが届きましたのでその中から「ベトナム情報」ということで会員の皆様にご紹介します。武山先生のお便りについてご意見ご質問などありましたら、広報部にお寄せいただければ、ご本人に届けたいと思います。お待ちしております。

ハノイ通信 平成14年10月30日(水曜日)発行

ハノイニュース

ハノイ成田間の直行便が6月29日より就航しました。その結果、今年の冬のハノイ人気は前代未聞だそうです。街にもずいぶん日本人観光客を見ることができます。3か月前からお正月近辺の航空券はほとんど満席状態だそうです。

現在のハノイは大変過ごしやすい気温です。旭川でいいますと9月下旬ぐらいでしょうか。私はまだ半袖のYシャツで過ごしていますが、ベトナムの人々の大半は長袖です。今日は毛糸の帽子にマフラー、そして革ジャンで通勤している人を見かけました。

1年前に比べるとバイクや車の量がかなり増えました。街の中は大変空気が汚れてきています。今年の夏は、結膜炎やものもらいがハノイで大流行しました。私も7月から昨日までで8回ものもらいになりました。

ハノイ日本人学校の児童生徒は現在80名。

ベトナムの結婚式

先日、日本人学校のスクールバスのドライバーさんの結婚式にご招待されました。やはり日本の結婚式とは、かなり違っていました。



1つは、始まる時間は決まっているのですが、終わる時間が決まっていないことです。夕方から始まって延々と夜中まで続きます。また、新郎新婦さんにご挨拶をしましたら、その後は各自テーブルに座り、でている料理やお酒などを飲んで、好きな時に帰るといった感じです。また、仲人や司会などはなく、会の流れなども全体の様子を見ながらといった感じです。ところかわれば結婚式も違うのだなと改めて感じました。

ハノイ通信 平成14年11月2日(土曜日)発行

いよいよ明日が、ハノイ日本人学校の運動会です。

ハノイ日本人学校にグラウンドがないため近くのグラウンドを借用して行うことになります。そのため、今日の午後から荷物の運搬、グラウンド整地、ライン引きなどに行ってきます。グラウンドや体育館のない校舎って、子どもたちにとっても我々にとっても厳しいものがあります。

ハノイニュース(今回はベトナムニュースなどから)

政府は、ベトナムにはバイクが多すぎる(交通渋滞・環境汚染)のために、今後段階的にバイク生産を縮小していく方針。

ベトナムコーヒーの海外輸出好調。

現在1ドル1万5300ドン。フォー(ベトナムうどん)が3回食べれます。

冬みかんが、もうすぐでおしまい。これからの冬みかんは、種あり。

洗っていない生ホルモン1kgが100円。

魚の水揚げ

先日、ハノイ市内から100km東のハイフォンという海辺の町に行ってきました。そこで魚の水揚げの様子を見てきました。

左側の写真が舟を待っている魚屋さんの様子です。もう1時間ぐらい待っている感じです。舟が海岸に着くと我先にと、海まで走っていき漁師と交渉が始まります。(中央の写真)交渉が決着しますと舟から、買い物かごいっぱいに入ったエビやかに買い(右側の写真)、それを市場に持って行き、売ってくるそうです。

冷蔵施設や輸送方法が余り整っていないために買った魚はすぐに近くの市場に行って売りさばかなければダメになってしまいます。逆に考えると必要な分だけ仕入れるということは、自然環境にはやさしいのかもしれませんが。



ハノイ日本人学校

武 山

takeyama

昌 裕

masahiro

会費納入のお願い

日頃より本会の活動につきまして、深いご理解とご支援をいただき誠にありがとうございます。

本会は皆様の会費によって運営されております。会費は全道大会の運営と研究推進、会の円滑な運営、推進のため、お手数でも滞りなく納入いただきますようお願い申し上げます。

なお、納入状況等につきましての照会は、事務局会計澤田崇までお願い申し上げます。

照会先

事務局会計 澤田 崇（札幌市立幌北小学校）

TEL 011-726-2461 FAX 011-716-0944

北海道国際理解教育研究協議会

年会費 3000円

郵便振り込みにてお願いいたします。

振込先 澤田 崇

口座番号 02750 - 4 - 3409

通信欄には、氏名、支払い年度、おわかりでしたら会員番号もお書きいただくと幸いです。

ご意見・ご感想・情報をお寄せください

北海道国際理解教育研究協議会

E mail kokusai@hokkaido.777.ac

(Eメールアドレスが変更になりました)

道内、国内、海外を問わず情報を事務局までお寄せください。また広報についてのご意見、ご感想もお待ちしております。

各地区における活動状況、実践報告、研究推進、各国の情報等を文書と画像も添付してお送りください。変換後、順次、広報に掲載して参ります。たくさんのお情報をお待ちしております。

発行 北海道国際理解教育研究協議会広報部

会 長 真木 孝輝(札幌市立もみじ台西小学校長)

事務局長 池田 幸一(札幌市立新陵東小学校長)

広報部長 古里 和雄(札幌市立手稲西小学校)

